一般研究・共同研究

英訳『教行信証』の諸問題

安　富　信　哉

はじめに

『教行信証』の翻訳は、容易ならざる事業である。そのため翻訳が着手されたのは戦後になってからである。『歎異抄』のの部分訳がすでに明治44年（華園兼定訳『精神界』11-7）に現われていることを想えば随分遅れている。いかに『教行信証』の翻訳が困難であるか領解されるであろう。

その困難の理由としては、「言葉の難解さ、分量の大きさ、加えて〔刊本の〕多くの小さな誤写と不完全さ」（山本晃紹“The KYOGYOSHINSHO”序言）が挙げられる。少し考えただけでも、東洋の思想を西洋思想の文脈に置き換えることの困難、表意文字である漢字を表音文字である英語に移すことの困難、何よりも翻訳に先立って本書の原意をどう解釈するかということの困難が想像される。『教行信証』は小説ではない。この本はよく咀嚼しない限り、まったく消化することができない。

それは、かって仏典が漢訳されたときに直面した困難に似ているように思われる。晋の道安は、「五失三不易」を挙げてその困難を説明したが、『教行信証』の英訳にもそこに挙げられたような困難がつきまとう。

しかし行手を阻む幾多の困難があるにもかかわらず、『教行信証』は翻訳が試みられ、現在までに全訳・部分訳をあわせれば七種の訳が出ている。古来「翻訳者ハ反逆者ナリ」（A translator is a traitor）の烙印が押されてきたが、それで翻訳者の意気が沮喪したことはなかった。『教行信証』の翻訳を最も早く手がけた稲垣最三氏は、「あふれ出る私の喜びと三宝への謝念を抑えることができ

ず、将来への叩き台となることを望み、あえてこの困難な仕事に取りかかった」（"Kyo-Gyo-Shin-Sho" 序）と述べている。

これから『教行信証』の標準訳があらわれるまでは、まだ幾星霜を要するであろう。聖書を例にとれば、J．ウィクリフによるラテン語からの英訳聖書が完成してから、ジェームズ一世のもとで47名の学者・聖職者の手によって欽定訳聖書（AV）が刊行されるまで、二世紀余の歳月がかかっている。

英訳『教行信証』が英語『教行信証』になるまでにもまだしばらく時間が必要であろう。おそらくこれから外国でも様々な翻訳を比較・対照しつつ、『教行信証』の思想に眼を開く多くの人々があらわれるであろうが、私たち日本人は、それらの欧米人を通して逆に『教行信証』の思想的意義について新しい角度から教えられることも多々あることと思われる。

筆者自身は、これまで『教行信証』の英訳事業に取り組んだ経験がなく、その困難の度合も観念的にしか知らないが、小稿では、これまでの労作を概観するとともに、その問題状況の一端に触れてみたい。

I　テキスト

A.　翻訳の歩み

まず最初に、これまでに刊行された翻訳の経過を、簡単に振り返っておきたい。

1954	(1)稲垣最三訳((部分訳)) 〔本派本願寺典籍シリーズ No 2〕
55	(2)ハワイ本派本願寺訳((部分訳)) 〔"The Shinshu Seiten" 所収〕
56	
57	(3)杉平顗智訳[(1)]((部分訳))

	〔『イースタン・ブディスト』vol 8-3 所収〕
58	杉平訳[2]((部分訳))〔同 vol 8-4 所収〕
⋮	(4)山本晃紹訳((全訳))〔華林文庫〕
65	
66	(5)龍谷大学翻訳センター訳((部分訳))
	〔龍谷翻訳シリーズ No V 所収〕
67	
⋮	
1973	(6)鈴木大拙訳((全訳))
	〔真宗大谷派刊〕
74	
⋮	
78	(7)アメリカ仏教会編纂((部分訳))
⋮	〔"Shinshu Seiten"所収〕
1983	(8)本願寺国際センター訳(1)((全訳))
	〔真宗翻訳シリーズ 6〕
84	

B.　各種テキスト概観

(1) "Kyo-Gyo-Shin-Sho"

—Introductory essay and translation of the General Preface, the Chapter on the True Teaching, and part of the Chapter on the True Practice—

Buddhist Publication Series No.2 所収

訳　者　稲垣最三

発　行　English Publication Bureau, Honpa Hongwanji, Kyoto　1954

本稿の内容は、序（3頁）、第一章　本書の紹介（44頁）——教行信証の目的、教行信証の概要、真宗七祖、真実教と方便教、行信の関係——第二章　本文（33頁）——総序〔全訳〕、教巻〔全訳〕、行巻〔部分訳、中途までの逐語訳〕——訳者註（7頁）より成る。

編集上の特徴としては、本文の翻訳に先立って、第一章で相当の頁数をさいて、『教行信証』の紹介がされていることである。また本文には各段落ごとにサブタイトルが付され、読者の理解のために便宜がはかられている。この翻訳は、最も初期の訳としてパイオニア的意義を有している。

(2) "The Kyogyoshinsho"

—The Book on the Teaching,Practice,Faith,and Attainment—

The Shinshu Seiten 所収

編　訳　The English Shinshu Seiten Compilation Committee

発　行　The Honpa Hongwanji Mission of Hawaii　1955

本稿の内容は、ハワイ本願寺（本派）より出版された英語真宗聖典の一部として、親鸞の私釈の部分を中心に30ページで『教行信証』がコンパクトに要約されている。巻末のレポートによれば、『教行信証』翻訳委員会が組織されたが、山本晃紹氏が単独で翻訳したとある。

編集についていえば、翻訳の底本についての言及はないが、『真宗聖教全書』Ⅱによっているものと思われる。各パラグラフごとに『聖教全書』との照合ページ番号が付されている。なお本聖典の終りの方に71ページのグロッサリーがあり、真宗の術語の語義的な説明が加えられている。

(3) "*Kyōgyōshinshō Monrui*"

—The Pure Land Document of The Truthful Doctrine, Work,and Attainment—

"The Eastern Buddhist"（Ⅷ-3，Ⅷ-4）所収

訳　者　杉平顗智

発　行　Eastern Buddhist Society

1957 November, 1958 August

本稿は、総序、教巻の訳（Ⅷ-3）と行巻途中まで（Ⅷ-4）を翻訳したものである。編集は、ワンパラグラフごとに、番号を表示して『教行信証』の原文を挙げ、その下に英訳、さらに詳細な註と解説がほどこされている。学術的な翻訳である。ただし総序には詳細な脚註がほどこされているが、教巻・行巻では語義的な註にとどめているのが残念である。

(4) "The KYOGYOSHINSHO"

— Translation of the whole text with footnotes and glossary —

訳　者　山本晃紹

発　行　華林文庫　1958

本書は、『教行信証』の完全訳で、現在まで現われた翻訳のうち、化身土巻まで訳された唯一のものである。

内容は、序文（4頁）、凡例（3頁）テキスト本文（332頁）、解説部（176頁）から成り、解説部は、〔A〕真宗の概略（21頁）、〔B〕グロッサリー（84頁）、〔C〕ビブリオグラフィ（4頁）、〔D〕インデクス（59頁）の各章がある。翻訳に際し、底本として西本願寺本を用い、ときに坂東本影印本を参照している。

編集の特徴として注意されるのは、176頁の解説部である。まず〔A〕真宗の概略では、Ⅰ「釈迦から親鸞へ」、Ⅱ「真宗の概要」Ⅲ「教行信証のア

ウトライン」の各章がある。説明の必要な事柄については、各ページに脚註をつけ、〔B〕グロッサリーでは真宗の術語について説明し、〔C〕ビブリオグラフィには重要な参考図書を挙げ、〔D〕インデクスでは索引とともに発音の手引が示されている。

訳者によれば、「本書の意図は同信の人々に宗教書として役立つこと。少くとも原典を読むための手引となること」であり、「そのためノートや註訳は、出来る限り省く必要があった」といわれる。

ただ原典との照合番号が打っていないので原文との照合が容易でないことは難点である。翻訳は正確を期した逐語訳であるが、表記法や訳語あるいはシンタクスなどに疑問点がない訳ではない。いずれにしても全文翻訳という前人未踏の難事業をやり遂げた本書は以後の翻訳の指針となった。

(5) "The Kyō Gyō Shin Shō"

—The Teaching, Practice, Faith, and Enlightenment—

Ryukoku Translation Series V 所収

監　修　石田充之

編訳者　稲垣久雄、湯川光紹、トマス岡野

発　行　龍谷大学翻訳部　1966

内容は、「凡例」(1頁)、「はじめに」(10頁)、「本文」(195頁)、「索引」(32頁)から成る。底本は、坂東本(『親鸞聖人全集』)を用い、ときとして西本願寺本を参照している。

編集は、学問的な精確さを期しており、本文は、〔A〕原文、〔B〕ローマ字訓よみ、〔C〕翻訳、〔D〕註釈から成っている。なおここで翻訳の対象として取り上げられた文章は、重要な親鸞の私釈、各巻の本願文および要文である。但し「正信偈」は別訳(シリーズI)に入っている。読者の便宜をはかっ

て、各章節には「現代語訳教行信証」(本派本願寺刊)に従ったパラグラフ番号が付けられ、また『真宗聖教全書』Ⅱのページと照合されている。人名や典籍の表記法は、原音表記(Nāgārjna, Vaidehī 等)と日本音表記(Zendō, *Bostatu Shotai Kyō* 等)とがあり統一されていない。

懇切な編集方針をはじめ、様々な点からみて、原文から『教行信証』を学ぼうとする外国人研究者にとって、最適の参考書であり、入門書であると考えられる。

(6) "The Kyōgyōshinshō"

—The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith and Realizing of the Pure Land—

訳　者　鈴木大拙

発　行　真宗大谷派　1973

本書は1961年の親鸞聖人の七百年の御遠忌の記念として計画され、親鸞聖人御誕生八百年、立教開宗七百五十年を迎えた1973年に出版されたものである。『教行信証』は、愈々鈴木大拙という世界的な仏教学者の手を通して翻訳されたのである。大拙は、西洋では主に禅の紹介者として知られているが、浄土教・真宗について生涯変らぬ関心を懐いていたことは余り知られていない。

この翻訳にあたって、師は「この仕事は真宗の布教のためにするのではなく、日本人の宝を世界の人々と分かち合うためにやるのだ」と述べたと云われる。その意味で、よい翻訳者を得た本書の出版は記念碑的な意義がある。

内容は、序文(西谷啓治　4頁)、編集者序(伊東慧明、岡村美穂子　4頁)、まえがき(伊東慧明　2頁)、本文(197頁)、グロッサリー(126頁)、チャート(22頁)、索引(85頁)より成る。

本文は、『教行信証』の全六巻のうち前四巻を全訳したもので、後半の真仏土巻と化身土巻は欠けている。底本は、西本願寺本を用い、坂東本を参照している。

翻訳は達意的な訳ではなく、原文を忠実に追った逐語訳である。従来の大拙訳のなかではこれは珍らしいことであると言われる。訳語は、大拙師自身の宗教体験を通した独創的な訳語が時として用いられる。「本願」をOriginal Prayer、「大行」をGreat Livingとするなど、『教行信証』の意を汲んだ師ならではの訳語がある。

ところで、大拙師は訳稿が完全に終了する年の1966年に逝去された。このため本書の完成のため、イースタン・ブディスト協会の関係者が大変な苦労をし、編集の仕事に携さわった。

本書の「編集者序」（P 8）に窺われるように、本書には様々な編集上の工夫が凝らされている。たとえば、親鸞の私釈の部分は大文字見出しにして、それと判かるようにし、引用された経・論・釈は右に数字寄せる、グロッサリーでは可能な場合には大拙師の解説文を引用〔DTSとする。残念ながら出拠は示されていない〕するなどである。『教行信証』本文の各章節は、原典と照合するための表示番号は打たれていない。

大拙訳『教行信証』は、様々な意味において後代に残る作品である。一部には、師の独自の訳語が、固定的な理解をもった西洋人に余計な混乱を引き起すのではないかという危惧を表明する人もない訳ではないが、多くの西洋人の間ではこの訳は、英語の薫り高いこなれた文章として高く評価されている。そのことは、「大拙博士によるこの重要な書物の翻訳は、研究者にとってかってない価値がある。英語の文体はこれまでの訳よりも一層自由で読み易い」（“The Eastern Buddhist” 1973, vol 8-2）というアルフレッド・ブルーム博士の評が端的に示していよう。

(7) "The Teaching, Practice, Faith, and Enlightenment"

—*Kyō-Gyō-Shin-Shō*—

Shinshu Seiten 所収

編　集　Seiten Committee

　　　　Tri-State Buddhist Temples

発　行　Buddhist Churches of America　1978

本稿は、アメリカ仏教会（ＢＣＡ）より発行された英語真宗聖典に収められている。全体は70ページで「正信偈」は別個に訳載されている。内容は、イントロダクション（13頁）と本文（57頁）より成る。また本聖典の末尾には、『教行信証』のグロッサリー（81頁）があり、本書の解説と註が付されている。

編集上の特徴としては、訳文・パラグラフ番号ともに、ほぼ先の龍谷訳（1966）と同一であるが、より見易くなっている。ただ術語、たとえば「即是其行」や「必得往生」は、龍谷訳そのままにローマナイズされているので、真宗の初学者には分かり難い点もあるのではないかと危惧される。今後本書がより福音的な翻訳になってゆくことが期待される。

(8) "The True Teaching, Practice and Realization of the Pure Land Way"

—A Translation of Shinran's Kyōgyōshinshō,vol 1—

Shin Buddhism Translation Series 所収

監　修　上田義文

編訳者　デニス広田他

発　行　本願寺国際センター，1983

本派本願寺では、親鸞の全著作を英語に翻訳する作業を進めてきている。Shin Buddhism Translation Series と銘打たれたこの企画は、「現在の研究

成果と教学の伝統をふまえた高い学問的水準を反映し、かつ一般読者に読み易いものを提供する」ことを意図して発足した。これまで『末灯鈔』(1978)、『唯信鈔文意』(1979)、『一念多念文意』(1980)、『尊号真像銘文』(1981)、『浄土文類聚鈔』(1982) がつぎつぎに翻訳・刊行され、1983年にはついに『教行信証』第一巻〔総序・教巻・行巻〕が発刊された。まだ刊行途上にあるが、第一巻を参照した限りでは、本書は、これまでの経験が集大成され、翻訳および編集の点からみて、大変に完成度が高いもののように思われる。

内容は、序（1頁)、章節リスト（11頁)、序文（34頁）——本書製作の年次、執筆の目的と本書の形態、本書と浄土教、本書の構造、親鸞の読経眼、真実教、真実行、訳者ノート——本文（113頁)、付篇（30頁）——テキストについて、親鸞の訓点について、人名及書名について——から成る。底本は、坂東本（『親鸞聖人全集』）が用いられている。

翻訳は、デニス広田氏という native speaker を領袖に迎え、稲垣久雄氏、徳永道雄氏らのベテランの学者の参加をえて、訳文は英米人に読み易いものになっており、評判もよいようである。また訳語について言えば、これまでの真宗の術語の翻訳は、しばしばローマナイズしただけで、英米人には意味不明のものが少なくなかったが、本書では生硬さをつとめて避けるとともに、たとえば「信心」は誤解を受けないように faith と訳さずにそのまま *Shinjin* と表記するなど慎重な配慮もされている。真宗の術語の説明については、先のシリーズの巻末にも付されているが、やがて真宗術語の手引を刊行の予定だといわれる。

とりわけ本書で眼をひくのは、いくつかの編集上の工夫である。読者の便宜をはかり新機軸が打ち出されている。主なものを挙げてみれば、第一は「章節リスト」である。これは目次の役割を果すもので、各章の小見出しとともにその中のパラグラフが番号化され、親鸞の私釈には＊印が付されている。

第二は、本文に入って「小見出し」の採用である。『教行信証』の各章節は、ある主題のもとに統一されているが、その見出しを親鸞はつけていない。そのため本書では小見出しをつけてその主題が明示されている。第三は、各章節の「番号化」である。この試みは、すでに先の龍谷訳（1966）で行われているが、本書では本願寺版『教行信証』（1973）の通し番号（ナンバリング）が採られている。第四は、『教行信証』の文章の「レヴェル化」である。『教行信証』は、私釈、経・論・釈の引文より成るが、その区別が一見したところ分かりにくい。本書では、私釈と引用文の活字のポイントをかえたり、またイタリックや“　”を用いて文章のレヴェル化が図られている。勿論この方法は、すでに出版されたいくつかの英訳『教行信証』にも採られているが、ここでは文章の差異がより明瞭な形で強調されている。

以上のような編集上の工夫は、ある意味で『教行信証』の文章の流れを止めてしまうような危険を秘めていない訳ではないが、西洋の audience を対象としている点を考慮すれば、納得できる方法と考えられよう。

C.　小結び

以上、私はこれまで出版されてきた数種の翻訳を概観し、先人の苦心の一端を窺ったのであるが、よい翻訳であるためには、訳文はもとより編集の良し悪しが大きな条件であることが痛感された。その一例として『教行信証』の各章節の番号表示の問題がある。

『教行信証』に章節番号が表示されていた方がよいか否かは、様々に意見が分かれるが、誰しも最初に『教行信証』を読んだときは、海図もないまま大洋を航海しなければならないような覚束ない感じを懐くであろう。西洋人の初学者の便宜からすればナンバーが打ってあった方が都合がよい。これによって簡単に章節を探すことができるからである。

その意味で、いくつかの『教行信証』の翻訳で章節表示（ナンバリング）が採られているのは有難い。残念なことに、現在のところ各聖典共通の章節表示はないが、これまでの章節表示では、一私釈、一引用文について、一番号と数えるという方法がとられるのが通例のようである。その場合、思想的な脈絡をふまえてのナンバリングではなく機械的なナンバリングとなってしまう。これでいいのかどうか。科文研究をふまえて今後検討してゆく必要があろう。

次に翻訳において重要なこととして、標準となる底本の問題がある。『教行信証』の読み方には未確定の部分が少なくないが、標準となる、底本が確定されないと翻訳にも影響が及ぶことになる。一例をあげよう。「教巻」の『平等覚経』引文は、坂東本では、

「もし大徳ありて、聡明善心にして仏意を知るによって、もしわすれずは、仏辺にありて仏に侍えたてまつるなり」

と訓まれるが、異本では

「若（なんじ）大徳あり、聡明善心にして豫め仏意を知れり、若（なんじ）妄に仏辺に在りて仏に侍せしにあらず」

と訓まれる。

山本晃紹氏の翻訳は、前者の訓み方を採用して、

"If it is that you possess great virtue,are wise and good in mind, know the Buddha's mind, and not forget it, you will be by the side of the Buddha and serve him"

と訳されているが、大拙訳『教行信証』では後者の訓み方を採用し、

"You are highly virtuous, endowed with intelligence and good will; you already know what the Buddha's wisdom is; it is not an inconsequential matter that you are near the Buddha and attending on him."

と訳され、また本願寺訳では、

"You are a man of great virtue, lucid intelligence, and good will, and you know beforehand the Buddha's intent. You have not in vain been at the Buddha's side serving him"

とやはり後者の訓み方に基いて訳されている。いずれが妥当であろうか。今後安定した翻訳が行われてゆくには、何よりもそれに先立って、『教行信証』の標準底本が公刊されなければならないであろう。

Ⅱ　その問題状況――訳語を中心に

A.　基本的ロゴスの訳語

親鸞の『教行信証』は浄土真宗の真実を開顕した教学の書である。親鸞は、真実開顕のために、仏教の長い思想の伝統に立脚して、自己の信念を披瀝したがそこに独自の概念が駆使されている。このため先人たちは、その語の翻訳のために大変な苦心をしてきた。ここで、先行の英訳『教行信証』において、基本的なロゴスがどのような訳語を付与されたか概観してみたい。

	大拙訳	本願寺訳	龍谷訳	山本訳
往　生	birth rebirth	birth	birth	birth
往生する	attain rebirth be born	attain birth be born	gain birth be born	gain birth
難思議往生	birth beyond conceivability	birth that is inconceivable	the Inconceivable birth	the All-Wonderful birth
難思往生			Inconprehensible Birth	Inconceivable Birth
双樹林下往生			Birth under the Twin Śāla Trees	Birth under the Twinshal trees
浄　土	Pure Land	Buddha Land	Pure Land	Pure Land
報　土 真実報土	Land of Recompense	Fulfilled Land; True and real land	the True Recompensed Land	Recompensed Land

辺　地		Borderland	Border Land	Border Land
無上涅槃	incomparable Nirvāna	Supreme Nirvana	the Unsurpassed Nirvāna	Unsurpassed Nirvana
正定聚	company of the right definite assurance	Truely settled ones	the group of Rightly Established State	the Right Established State
証	realizing	realization	enlightenment	attainment
正覚	Supreme Enlightenment	perfect enlightenment	perfect enlightenment	the highest perfect knowledge.
五　逆	five grave offenses	five grave offenses	five deadly sins	five deadly sins
十　悪	ten evil deeds	Ten transgressions		Ten sins
煩　悩	passions	blind passion	evil passions	illusion
凡　夫	the ignorant	Foolish Being	a common mortal sentient beings	common mortals
行　人 行　者	devotee (s); practicer	practicer	followers; practitioner	Way-Seekers
善知識	good friend; a man of great wisdom	True Teacher	good master; good teacher	Good Teacher of the Way
本　願	Original Prayer	Primal Vow	Original Vow	Original Vow
選択本願	Original Prayer which is especially chosen	Selected Primal Vow	the Selected Original Vow	Selected Vow
大　悲	great unconditional compassion; absolute compassion	True Compassion	the Great Compassion	Great Compassion
増上縁	efficient cause [for birth]	the decisive cause of birth	Dominant condition; the decisive condition	the Highest Promotive Circumstantial Agent

他　力	other-power	Other Power	Other-Power	Other Power
方　便	expediencies; skilful means	Provisional means; compassionate means	expedient	expediency
回　向	*ekō;* merit-turning-over	Giving; being given; Amida's directing of virtue to sentient beings	Merit-transference	merit-transference
往相回向 還相回向	the outgoing *ekō* the returning *ekō*	the aspect for our going forth to the Pure Land the aspect for our return to this world	the phase of Going the phase of Returning	the phase for being born in the Pure Land the phase for coming back to this mundane world
発願回向	Prayer is raised and its merit is turned-over [to all beings]	Apiring for birth and directing virtue	*Hotsugan-ekō*	*Hotsugan-ekō*
尽十方無碍光如来	Nyorai of Unimpeded Light reaching the furthest ends of the ten quarters	Tathagata of unhindered light filling the ten quarters	Tathāgata of Light Unhindered in the Ten Quarters	Buddha whose Light Unhindered in the Ten Quarters
不可思議	inconceivable	Surpassing Conceptual Understanding	Inconceivable	inconceivable; the incomprehensively wonderful
名　号	Buddha Name	Name	Name	Holy Name
念　仏	nembutsu	Nembutsu	Nembutsu	Nembutsu
称　名	pronounce the Name	Saying the nembutsu	the utterance of the Name	the pronouncing of the name
大　行	Great Living	Great Practice	Great Practice	Great Practice

一乗海	One Vehicle Ocean; Ocean of One Vehicle	Ocean of the One Vehicle	Ocean-like One Vehicle	Sea of One Vehicle
正　念	right-mindedness; right thinking	Right-mindedness	the Right Recollection	the right thought
一　念	one thought; one moment of thought	One Moment	one utterance; one thought	One Thought
自　利	self-benefiting discipline	self-benefit		Self Help
雑　行	mixed way	sundry practices	the Sundry Acts	Sundry practice; Sundry Acting
信　心	faith believing mind	*shinjin*	faith	faith
大　信	Great Faith	Great *shinjin*	Great Faith	Great Faith
横　超	leap crosswise	Leaping crosswise	the Crosswise Transcendence	crosswise leap
不退転	nonretrogressive; stage of nonretrogression	Nonretrogression	the Unretrogressive (Stage)	Unretrogressive State
聖道門	path for holy men	the Path of Sages	the path of Sages	path of Sages
浄土門	Gate of Pure Land	Jodo Buddhism; the Pure Land Way	the Gate of the Pure Land	the Path that Leads to the Pure Land

B.　解釈の葛藤――「信心」の訳語をめぐって

言語は、それ自体が文化的・歴史的背景をもっている。そのためある言語を別な言語体系に置きかえるときには、原意の喪失あるいは変型という大きな危険を覚悟しなければならない。とくに『教行信証』のような思想書を外国に伝

えようとする場合、その概念を翻訳することには非常に困難な問題がつきまとう。仏教語全般に標準的訳語がない現在、『教行信証』の訳語の決定にも様々な紆余曲折があったことは、翻訳者や編集者のノートからも十分に窺われることである。その様々な訳語をめぐっての検討は、これから国際的規模で展開されるであろうし、またその検討は親鸞の思想を見定める為にも極めて実り多いことであるに違いない。本節では、これらの訳語のなかでしばしば問題になる「信心」という語をとり上げて、その問題状況の一斑をさぐってみたい。

信心は、真宗における中心概念である。真宗の信心は、独自の意味をもち、とくにキリスト教世界である欧米にその真意を伝えようとするには様々な問題を伴い、また誤解を受け易い。そのことは、開教使や外国人の研究者に常々指摘されるところである。

まず長い間シカゴを中心に開教活動を続けておられる久保瀬暁明師（Rev. Gyomay Kubose）の言葉を聞いてみよう。

「念仏の世界を次元を異にするアメリカ人に伝えるには色々の問題があるが、第一に考えられる事は言葉の問題である。英語はキリスト教文化と共に発達して来たものであるからキリスト教の二元論の概念が言葉自身に内在しておる。それだからキリスト教の言葉で仏教を訳すと多くの場合全く違った意味に了解されるのである。最も誤解され易いのは信心の信である。信をfaithと訳せばそれはキリスト教的信であって人間が神を信ずる信で、人間の主観の信である。被造物である人間が造物主である神を信ずる信で二元論の上に立つ信で、真宗で云えば自力の信である。親鸞の言う信は他力の信であって『まこと』であり、個人の自力の信ではない。『信巻』の信楽の釈にある様に『信は即ち是れ真也、実也、誠也、満也』の信で個人の主観的に只信ずる信ではなく真実誠満、極成用重、審験宣忠の信である。信心はまことの心である。主観的信であって客観的妥当性をもった信である。親鸞の信を

belief とか faith に訳す時にそれは只単なるAがBに対する信になって親鸞の云う他力の信、廻向の信、まことと云う信にはならない。そこに根本的誤解が生ずるのである。アメリカの多くの人が真宗の翻訳書を読んで、アミダの Grace（恵み）を信じて助かる様な信仰はセントポーロの信仰で沢山だと云うのである。真宗などアメリカに必要ないと云うのである。これは信が faith と訳されて、間違って解されておるからである。真宗の信は truth か又は花文字の大きな F を用いて Faith と書いて faith と区別す可きだと考えられる。」

（「真仏教とその問題」『親鸞教学』十三号）

以上のように、久保瀬師は、自からの体験を通して、真宗の「信心」が英語に相当する語がないことを指摘し、また faith と訳した場合に生じる問題性について言及されている。またアメリカの研究者の間でも、「信心」という語が faith と違った概念であることが指摘されている。カリフォルニア大学（バークレー校）博士課程のマーク・ブラム（Mark Blum）氏は次のように述べる。

「親鸞における『信心』の信は、その教学思想の源泉として大変に根本的なものであり、それゆえにこれを単に“believing”とか“faith”と訳するのは彼を不当に扱うことになることは言うまでもない。宗教的文脈で用いられる限りは、いかなる意味においても、そうしたからといって、“faith”の重要な意義の品位を下げることにはならない。「信心」と“faith”を比較することは、十分な根拠があるし、もちろんこの二つの語は意味の広い領域において重なるところがあるが、二つの概念を比較することが小論の目的ではない。しかし親鸞にとって、信とは、自らが帰依した教えの終末論的価値をただ信ずるというだけではなく、真実、リアリティそのものを示しているということが分かる。それに加えて、信とは静的な概念ではない。なぜならば、『用なり……審なり、験なり』の語で親鸞が示したように、信ずるとは、活

発に尋ね、検討し、すなわち問うことである。われわれが心にとどめておかねばならぬのは、『信心』における信あるいは信仰としての要素は、『証明に立脚しないところの信』(Stein ed. 1975 :475) とか『信頼して受け入れる』という表現で示されるような、西洋における伝統的な信仰概念とは異なる何物かを示しているということである。」

('Shinran's Concept of *Shinjin* in the *Kyōgyōshinshō*' "Journal of Asian Culture" vol.Ⅳ Spring 1980)

以上のように、「信」あるいは「信心」と英語の 'faith' との間にある意味の差異性は、すでに先学に指摘されているところである。しかしこのような危惧にもかかわらず、現実にそれに代わる適切な訳語がないこと、faith という語のもっている包容性あるいは一般性から、従来の英訳『教行信証』では、「信」「信心」に対して 'faith' の語があてられてきた。

これに対して、「信心」をあえて訳出せず *Shinjin* と日本語のまま残しておくという方法を採ったのは本願寺訳 (Shin Buddhism Translation Series) である。本シリーズ最初の "The Letters of Shinran――Mattōshō" (1978) のグロッサリーに、その理由として、

「信心は普通 'faith' と訳されてきたが、この語は、ユダヤ・キリスト教的な用語として余りにも強くまた様々に色彩られているので、この語を用いるのは信心の本来の正確な意味を損うことになる、とわれわれは考えた」。

と説明されている。

この "The Letters of Shinran" の出版に対して、ウィスコンシン大学 (ノースランド校) 教授のトマス・カスリス (Thomas P.Kasulis) 氏は書評を寄せた。そのなかで「信心」を '*Shinjin*' と原語で残し、「浄土」を 'Buddha Land'、「義」を 'self working' と訳したことについて所見を述べたが、「信心」を 'faith' としたことについては、

「第一にいままでの真宗の翻訳に親しんできたものには、従来ほかの翻訳で'faith'と訳されてきた『信心』が *shinjin* と日本語のままローマナイズされていることに驚くであろう。……その立場は筋が通っているし、私は、真宗教義の有神論的様相を過度に強調するべきではないということには同意する。もし'faith'という語を避けることが、この点で役に立つのであれば、私はこの変更に同意しよう。」

(“Philosophy East and West” vol. 31 . No2. April 1981)

と一応その立場を支持している。しかしカスリス氏は同時に、「信心」も「信」もともに区別なく *shinjin* と訳されていること、「信ずる人」の訳に“people who believe”と belief の動詞である believe が用いられたことに疑問を投げかけ、また *shinjin* をそのまま「まことのこころ」と置き換えているのは拡大解釈ではないかと指摘している。

このカスリス氏の批評をふまえて、本願寺真宗翻訳シリーズ委員会は、この語を訳出せずに *shinjin* と原音をローマナイズしたまま残した理由について、「『信心』と“Faith”」と題して再度説明した。

「信心と faith の根本的な違いは faith の概念は神（創造主）と人間（被造物）という二元論に立脚するが、一方、信心は、仏と人間が一体となることであり、人間が仏となってゆくことである」

(“Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls—Songō Shinzō Meimon” 1982 巻末)

この相違点をふまえて、「信心」を訳出せずにローマナイズしたのであるが、それは、先入観念より自由になるという点において好ましいと言われるのである。

ある特別な語の原意を保持するために、翻訳するべきか否か。ある思想を異文化世界に伝達しようとするために、翻訳者はしばしばそのような岐路に立た

されることがある。そのことは、梵語仏典の漢訳に際してもしばしば生じた問題であった。訳経史の上で最大の仕事を遺した玄奘は、梵文を漢訳する場合に、ただその音のみを写して語義を訳さないものに五種の類例があるという。

(1) 陀羅尼のように秘密のもの

(2) 婆伽梵のように多くの意味を含むもの

(3) 閻浮樹のように中国には存在しないもの

(4) 阿耨多羅三藐三菩提のように以前の訳者が音写して一般に意味が知られているもの

(5) 般若のように智慧と訳すれば軽薄になるから尊重して訳さぬもの

以上の五種の梵語は原語のまま音写して訳さないとされる。この玄奘の「五種不翻の義」に倣って、いま「信心」を(2)(3)に相当する概念として、あえて訳さず音写することは、訳経の前例に随う方法として許容されるであろう。

ただ、欧米人の立場からすれば、「信心」を'faith'と翻訳することは、自からの宗教的観念との間に関連性を見出しやすいという利点がある。さらに親鸞の著述に親しむにつれて、かれらは「信心」、すなわち浄土真宗の信仰が、キリスト教的信仰（faith）とかなり異質のものであることを自然に了解してゆくことになる。それ故にこの語をあえて英語に訳出することもまた大きな意義があるのである。ミシガン大学のゴメス（Luis O.Gomez）教授は、"Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls—Songō Shinzō Meimon"の書評のなかで、

「『信心』は、たんに'faith'ではなく、それは、'believing mind'であり'mind of faith'である——ということは、正しいし全く明瞭なことだ。しかし私には、『信心』は、faith の一般概念の一例であって、この事実が大胆にハッキリと受け入れられるならば、真宗は明瞭な説明的立場を得るであろうと思われる。このように受け入れることによって、真宗の信仰とプロテスタントの信仰との間に存する区別が不鮮明になるのではないかと恐れてはなら

ないのだ」

(“Monumenta Nipponica” vol ⅩⅩⅩⅧ No1 Spring 1983)

と述べているが、傾聴すべき意見である。

「信心」は、欧米にいかに表現されていくべきであろうか、という問題は、これからも波紋を広げてゆくことになりそうである。今後『教行信証』をはじめとする親鸞の著作がさらに翻訳され、またその著作の研究が欧米で深められてゆくにつれて、「信心」の真実の意味が徐々に欧米人の前に明らかになってゆくであろう。その意味で、去る三月真総研でコルゲート大学教授のカーター（John Ross Carter）氏が‘*Shinjin*:more than Faith ?’と題して行った講演は記憶に新しい。

カーター博士は、「信心」の構造分析を通して、信心は浄土真宗の宗教的表現であること、信心に先立って帰命と聴聞があること、信心は他力であること、信心は弁証法的な働らきであること等々、に着眼し、キリスト教とは異った伝統のなかにある浄土真宗の「信心」を‘faith’と訳することに躊躇するところがあると述べられていた。このような浄土真宗の概念をめぐる対話が活発化してゆくなかで『教行信証』は愈々本格的に日本人の手から欧米人へ手渡されてゆくであろう。